

第16回(平成28年度 第5回) 東近江市市民協働推進委員会 会議録

開催日時 平成29年3月24日(木)午後4:00~6:00

開催場所 東近江市市役所新館 311会議室

出席者

市民協働推進委員 深尾昌峰、森井源藏、小倉昌和、楠神渉、築山清美、森下瑠美、
北井香、荷宮将義、藤澤彰祐、大橋正徳、横田真也

事務局 まちづくり協働課 福井、村田、村井

(傍聴者:0人)

議事 ・「若者のまちづくりへの参画」について

- ・協働推進計画の進捗管理
- ・今年度の市民協働推進委員会の活動について
- ・来年度の市民協働推進委員会の開催内容について

会議録

開会

【事務局より開会のあいさつ】

【委員長よりあいさつ】

【若い世代のまちづくりへの参加を促進するには】

< Aチームの検討状況の発表・今後の取組みについて >

・資料1に基づき事務局より説明

(委員長)

こういう風につなげていきたいとか、こういう風にデザインしていったらいいとか、
そういった議論があればご紹介いただきたい

(Aチーム委員)

つなげていくというところでは、とりあえずここで話題に出たところから広げていくとい
うのも1つの手だなというのと、また違ったターゲットで開催してみるという意見も出てい
ました。

(委員長)

テーマやターゲットとするみなさん方の属性もそうですし、例えばこの10人とか15人
の人たちが集まってもらって、1回喋ってもらって、そこで継続性を見つけていただきたい
ですね。1回きりのイベントで終わってしまうとなかなかまちづくりへの参加とか参画とい
うテーマでいくと、そういう人たちが日々はまちづくりに参加出来ないけど、子どもがいる
ことで逆にこういう参加が出来るとか、そういうのがつながっていくと面白いなあと思いま
す。こちらとしてはこういう人たちとこういう議論をしようという文脈があるわけですが、
逆に参加した人からするとお菓子食べたなとかなんだったんだろうって感じにしかならな
いと、あえてやる意味が見えないかもしれないので、そういう意味ではそういう人たちとみ

なさん方がいろいろ一緒に話してもらおう中で、じゃあ次はこのテーマでもう少し話しましょうとか、もう少しみんなでこういうことを勉強したら面白いですよとかみたいな、輪をつないでいったり、その人達を次にまちの主体に変えていくとか、参加主体に変えていくとか、例えば良くある話だと、車いすに乗っている人たちがいつもは弱い存在としてケアしてもらおう存在なんだけど、車いすを押させてあげるボランティアは出来る、みたいな発想があるわけですよね。車いすに乗っているからこそ出来る支援があるわけです。車いすを押す技術を身につけたい人たちを応援する存在になる。そういう風な広がりを考えられれば、来てくれたお母さん方もただ単にお茶を飲みに来たとかお菓子を目的にというよりは、そういう場が楽しいとかもっと喋りたいとかっていう空気を作ってもらえると次につながったりとか、その人達ももっと喋りたいとかもう一回集まろうよみたいな声が出れば大成功かなという気がします。

(委員)

後に残らない感じというのは、どんどん集まりにくくなったり次に来てもらいにくかったり続けにくくなっていくのかなと思うので、何かのテーマなり、ゴールというかちょっとしたイメージを持っておいた方が、参加した人もポジティブに集まれる仕掛けになるのかなと思いついていました。1回集まってやってみるというくらいなら今の感じでも良いと思うんですが、その次にどうやっていこうというのをちょっと出していた方が意欲がある人が集まってきて、その人達を続けて関係を作っていけるのかなと思います。それをどう設定するかということまでは思いついていないのですが、まちづくり何か変えてみようとか大きなものじゃなくて、私たちの日頃思っている何かを言葉で表してみようというくらいのさやかなもので良いと思うのですが、何かゴールがある方が来た人の手応えにもなるのかなと思います。

(委員長)

そこはどう見せるかだと思います。あんまり重たすぎて、いつもの人しか来ないという構造は狙いとは違うわけですよね。いつも出てくる人じゃない人に来てほしいというところで、Aチームの中で、今日のこの場はこういう風になったら成功だよという成功像を固めてもらうと、どういう呼びかけをして、どういう持っていく方をすれば良いかが見えてくると思うので、ぜひそこにチャレンジして、いい場ができれば他の地域でも出来ますからね。他のみなさん方からアドバイスがあればぜひ。

(委員)

チラシを作るときのメインタイトルというか、集めるための具体的なテーマがあって、輪を作っていく方向にしていけないといけないかなと思って、人に集まってもらうための道具というか、集まって何するのとか何のために集まるのっていうのがないと、いいチラシが出来ても誰も来ないんじゃないかと思うのですが。

(Aチーム委員)

なぜお母さんになったかという、若いお母さんは東近江市歴の若いお母さんで、どこから移住してきたお母さんがなかなか地域になじめないだろうという風な視点からターゲットを若いお母さんにしたんですが、その人達が孤立ではなくてもなかなか地域になじめないけど友達とか作りたいたいと思っていたり、もっと地域に参加したいなというきっかけづくり

の1つとしてやってみたらどうかという話だったので、どういう目的でということまでは出来てませんが、「お茶を飲みながらお友達を作りませんか」みたいなキャッチコピーにして行こうかなという話でした。

(委員長)

そういうので十分響く人たちはいると思います。逆に言えば本当にそういうことで悩んでいる人にちゃんと届けば来てくれるだろうし、そういうのが糸口になればいろいろ悩みを抱えている人たちが来られるから、そういう聞く場にもするということからまちづくりへの議論につないでみるとか、次へのまなざしが見えてくると思います。今設定されている人たちと出会うというのは良いと思うので、その出会い方とか本当にその人達と出会えばとてもいい会になると思います。そこはやはり数というよりは、5人でも6人でも来てくださって、僕たちが表層的に語っている悩みとはまた違った本音が聞けると面白いなと思います。そういう中で簡単に解決できる問題もあると思うんですよ。例えばまち協さんをつないであげたらとか、この人とこの人が知り合いになったら解決するとか、そういうのをじゃあ次はこういう場でとかでも良いし、そこをぜひ言いつ放しややりっ放しにならないデザイン感があれば面白いなと思いますね。

(委員)

先ほどからママ友というキーワードがあって、私は経験したことがないのですが、私の近所にお寺があって若い奥さんがいるんです。しょっちゅうお寺の駐車場でワイワイガヤガヤされていて、何をしているのか不思議に思っていたのですが、出会う機会があって何をしているのか聞いてみると「ママ友なんです」と言われて、そんなに良くすることができるのかなと思ってとても興味が出てきました。どうも様子を見ていると地元の自治会の人には来ていなくて、車で遠くから寄ってくる感じなんです。何をするわけでもなくて、お金をもらっているわけでもなく、すごく面白いと思って、単なるママ友と言われるのですがどういうところに魅力があるのかとか、何かうまくつなげていければなぁと思いました。

(委員長)

逆に言えばそういう場がいろんなところで複層的に地域にはあって、ママ友がたわいないことを喋っている、そういう意味ではそういう場に出ている人たちは良いと思うんです。僕は東近江で生活していないので良く分かりませんが、僕らの周りでいくとかなりあると思います。要はコミュニティに属せないお母さん、孤立しているお母さんというのは想像がつくんですね。そこら辺のところをみなさん方が暮らす実感としてそういう人たちいるよねというのであれば十分意味があって、みなさんなりにテーマなど設定してもらった中で、結果としてまちのことを考えるような場になれば非常に面白いと思います。期待をしたいと思います。

< Bチームの検討状況の発表・今後の取組みについて >

・資料2に基づき事務局より説明

(委員長)

本当にいいですね。大人が励まされるというか、今の若い世代の人たちが考えていること

とか、田んぼとかも彼らから見るとなくなってほしくないと思ったり、田園というものも彼ら自身が価値を持ち始めていて、あきらかにちょっと前の典型的な若い人とは考え方とか見方が変わってきていますよね。ほどよい田んぼを残したいとかなかなか良いコメントですよ。やっぱり本当に馬鹿に出来ないというか素晴らしいなと思いました。実際行かれた方から補足であったり、今回のを受けてもうちょっとこういうことをやりたくなったりとか、こういう風につながっていけば良いんじゃないかということも含めてコメントいただければと思います。

(Bチーム委員)

今回企画する段階で、大人があまり仕掛けを作ってしまうんじゃなくて、できるだけ対等な立場でお互いが語り合える場にしたいということで、本当はまちづくりみたいなのところを聞きたいんだけどそれは前面に出さずに、私たちが語るから夢を語りましょうという風にしたのが良かったと思います。私たちからしても中学生の生徒さん達がこんなやりたい夢を持っているとか、まちに関しても思っていることを聞くことが出来ましたし、中学生の生徒さんにしてもこんなおじさんおばさんでも夢をもってるんだとか感じてもらえたのかなと思います。一緒の場で一緒の立場で語るというのが良かったと思います。また、私たちが気づいたように生徒さん達も気づいたことがあると思いますし、また次につなげられるのかなとやってみて思いました。

(Bチーム委員)

意図してではないですが、まちづくりに関連しそうなテーマをチームで集まったときに考えて、誘導しなくても中学生から商店街がさみしいとかシャッターがもうちょっと開いたら良いとか、具体的にまちづくりにつながるような意見を聞くことが出来たので、もし次のできるのであれば、中学生と地域を動かせるような人が少し入って一緒に話し合えたりすると、地域の大人にとっても少し気合いが入るのではないかなと思います。そういう手応えを感じることが出来る会でした。

(Bチーム委員)

円になって1人ひとり話していったので、私も中学生になった気分で、同じ目線に立って話が出来たので、子ども達も喋りやすかったし親しくもなれたんじゃないかと思います。

(Bチーム委員)

私は記録係をしていたので話の輪には入ってないのですが、みんな笑顔で喋ってたのが印象的でした。

(Bチーム委員)

みんな子ども達主体でやったという感じで、私たちがさせている感ではなく、中学生が活発に意見を出してくれて非常に良かったです。生徒会をやっている1年生2年生というのもあったのかもしれませんが、人数的にも20人くらいで全員が喋れる雰囲気良かったです。これから地域のイベントやまちづくりをするにおいても大人が考えてやるだけでなく、子ども達目線で子ども達が主役になってやるとこんな風に輝いてやるんじゃないかなという感じを受けました。

(委員長)

人数的にもしつらえ的にも最初にやった取組みとしてはかなり大成功だったんじゃない

かと思います。

(Bチーム委員)

まちづくりの原点に返れたというか、まちづくりをしますと言いながらまちづくりはしないほうがいいんじゃないかと。中学生達から自分達にとって楽しいものを作ってほしいという意見が出て、例えばどんなものが聞くとスタバとかとても分かりやすい答えではあったんですけど、それを「じゃあ君が作ったらいいやん」という話をしたときに彼らの反応は面白くて、「え、作っていいんですか」って言ったんですよ。もしかして大人がお店を作るのは難しいとか、資本はどうするんだとか、それをしてどうなるのかとかという話をやりすぎてきたんじゃないかなというのをすごく感じて、ちょっと時代が違うんだなと思いました。話の入り口の大切さも非常に感じました。

(委員長)

小学生でもなく高校生でもない中学生というのが、まちにとって非常に意義を感じましたし、なによりも皆さん方のように夢を持っているような、目を輝かしてまちのことを考える大人とたぶん出会ったことがなかったり、商売している人ともっとこんな面白い場所がほしいといった話ができるような場とかが出来れば、それこそ魅力的な場になったりまちづくりになるわけです。そういうことにわれわれが気づけただけでも大きな意味があると思いますし、こういう若い世代がたくさんきっとまちにはいるんだろうと思うと、私たちがいつもこういうまちづくりを語る場の硬さと偏ってる感というか、こういう普通の生活の中や話の中でどういう風に聞き出していけるかということが非常に大事なんだと教えられますよね。これをどう次につなげていく、継続性というか成果をどういう風にまちに残していくとか、ぜひBチームとしては考えてつなげていただいたら、大人達ももっと元気が出るというか、いろんな人たちが今回みなさん方がした経験をしたり、中学生ももっといろんな中学生がいるでしょうから、面白いと思いますので、ぜひ作戦会議をしていただきたいと思います。

< A・Bチームに分かれて、今後に向けての打ち合わせ >

(委員長)

今後、こういった協働とかまちづくりとかから入るんじゃなくて、生活空間から入りたいというのは当初から思っていたことでもありますので、小難しい議論というよりは素朴に楽しいことやまちというところから入るような取組みに育っていければ良いなと思います。そういうものとラウンドテーブルが将来的に結びついたときに化学反応が起こるだろうなと思いますので、来年度も取組みを進めていただければと思います。

今日の議題としては2つあって、大きくは今の今年度取り組んできた若い世代への報告などをみなさんでシェアすることと、委員会の活動を総括するという意味合いも含めて協働推進計画の進捗管理があります。資料を作成していただいておりますので事務局から説明をお願いします。

【協働推進計画の進捗管理】

資料に基づき事務局から説明。

- * これまで未検討だった基本施策 1 「若い世代のまちづくりへの参加促進」については今年 1 年議論をして進めてこられた
- * 地域担当職員制度について委員会で検討した内容が実際に導入できた
- * 地域自治に関する連合組織の一元化については未検討

【今年度の市民協働推進委員会の活動及び来年度の開催内容について】

資料 3 ・ 取組内容資料 ・ 資料 4 に基づき事務局から説明。

- * 今年度は委員会 5 回、協働大賞に係る審査やヒアリング、若者のまちづくりへの参画について 2 つのチームに分かれて検討を行った
- * 来年度は若者のまちづくりへの参画について検討を継続、協働大賞の審査やヒアリング、新たに協働推進企画の進捗管理と検証・評価方法の検討について取り組んでいきたい

（委員長）

進捗管理については、この委員会の中で自分達で作っていただきながら、体を動かしながら進めていくことが出来ました。円卓会議の仕組みづくりも動きつつあり、三方よし基金との連携などで新たな動きやいろんな人の参加にもつながるのではないかと思います。また、この委員会としてどこまでどういうところを目指していくのかというのは大事なところだと当初から議論をしてきましたので、来年度も議論していきたいと思っています。今日の前半の議論にもありましたが、中学生との話し合いも大人を巻き込むということも実は同じなんじゃないかという風に思ったりもしています。今、若い世代だとか若いお母さん方に来てもらうにはあまり小難しくいかないでおこうということになってはいますが、大人も一緒だろうし、子ども向けにしていることが実は全体的にも良いという話かもしれませんので、そこで出てきた知見とか経験値みたいなものを共有をしたいと思いますし、まち協さんとの接続感などにつながると相乗効果が生れてくるのではないかと思います。

他の委員会とは違って、厚みのある、実際にまちにとってアクションが生れるという非常にまれな委員会運営を今年度もしていただくことが出来ました。改めてお礼を申し上げたいと思いますし、来年度も引き続きポジティブに動きを作り出しながらチェックをしていきたいと思っています。

【事務連絡】

- * ふるさとづくり大賞受賞について事務局より情報提供

地域活性化センターが毎年しているふるさとづくり大賞というものがあり、先日、総務大臣賞の地方自治体の部をいただきました。いただいた理由として、合併して住民主導のまちづくり協議会が出来たことやまちづくり条例が出来たこと、それから地域担当職員制度が出来たこともあります。もう 1 つ S I B という言葉が出てきましたが、深尾先生の御指導もあって東近江市のコミュニティビジネススタートアップ事業がみなさんから 2 万円ずつの出資をいただいて、例えば蒲生地区ですと 25 名 50 万円というお金をいったん市民の方から集めていただいて、そのお金を事業者にお渡しをして事業を行います。今までですと行政と

事業者の1対1の関係だけであって、領収書のチェックなどをして補助金を渡していたものですが、今回はそれぞれの事業者が達成目標を掲げて、その事業が失敗するとお金が返ってこないという仕組みです。先日第3者委員会でその目標が達成できたかどうかを検討していただいてすべて達成できているということで、ようやく市からお金を出させていただけということになりました。この間、例えば蒲生の夢工房協議会ですと、そこに応援してくれた方は2万円で口を出す権利を買ったんだと言われました。事業を応援したいけども行政から補助金をもらっているだけだと、がんばらばったらいいわということになりますが、自分が2万円出しつつ、コガモカフェにお友達も連れて行って食事もしますが口も出すということで、非常にみんながおせっかいになって事業を応援したという、期待をしていた以上の効果が出たのかなと思います。クミノ工房の井上くんについても事業計画が甘いとかパッケージが大事とか、みんなにいろんな葉っぱをかけられて、ようやくできました。買うエコ大賞であるとか林野庁の表彰を狙っているとかブレイクしそうな感じになっています。ただ補助金を市が出しているというだけではなくて、市民のみなさんが応援してくれた結果がなんとか花開きそうになってきた4つの事業が認めていただいたのかなということで、下に賞状が飾っております。3月30日に浜野会館で4つの事業者に来ていただいてプレゼンテーションをしていただくんですが成果発表会というものをやりますのでぜひご参加いただければと思います。

(委員長)

実はこのSIBの仕組みは全国的に良い波紋をよんでおりまして、この発表会も岡山からバスで来られると聞いておりますし、前日から取材も入ります。いろんな人たちがいろんな形でこの仕組みを褒め称えてくださって、かなり東近江が熱くなっておりますので、ぜひ発表会も交流会も来ていただければと思います。全国で実際に市民がお金を出してこういった形でこの仕組みを回したというのが日本の中でまだ東近江しかないんですね。ですので、すごいまちだとなっております。小さい仕組みですけど、だけどみんなが参加してある意味で協働の仕組みとしてはみんながお金まで出して、さっきの口を出す権利っていいなと思うんですね。口を出すというのは加味するということですよ。みんながそういうことが出来る、参加の1つの仕組みとしては非常に面白い、みんなが支え合ったり応援し合うという私が予想してた以上の成果がみなさん方のおかげで出ましたので、これも来年につなげていきたいなと思います。厚労省もこういうタイプの助成金の事業を東近江でやりたいと言ってますし、いろんな反響が出てきております。東近江だからこそ出来た仕組みだと思っておりますので、今後も協働のモデルとして捉えていければと思います。

閉会